「なら」と前件の動詞*

村　山　康　雄

Japanese *Nara* and the Verb of S_1

Yasuo MURAYAMA

Japanese conditional *nara*, like other conjunctions, functions to connect two clauses (S_1 and S_2) and states the condition, S_1 under which S_2 happens. It is shown that such verbs as *sippaisuru* (fail), *oboreru* (be drowned) and *byooki-ni-naru* (become sick) cannot co-occur with it. I will argue that this is because these verbs express an 'unvoluntary' resultant state rather than a 'voluntary' action. In other words, they imply a situation which comes out naturally beyond human will. In using *nara*, the speaker makes the judgement in S_1 that it is so on the basis of the information he gets from outside and makes his own statement in S_2. No one can judge that such a situation will exist. Yet if followed by (*si*)*sooda* (be likely to), *yooda* (appear) and *kurai* (degree) or used in the past-tense form, these verbs can be used with *nara*. Because the speaker can judge that there is now an appearance, outlook or probability that such a situation will exist, or that such already exists.

I

「なら」は元来「断定」を表す助動詞「だ」の仮定形で，「と」，「たら」，および「ば」と同様「条件」を表わすと言われている。体言や一部の助詞，および動詞・助動詞の終止形に接続する。

その特長として，後件には，前件の動作が完了しなければ可能とならないような動作・状態は現われないことが挙げられる。[1]

(1)　*アメリカへ行くなら，日本のことが懐かしくなるでしょう。
(2)　アメリカに行くなら，沢山お金が要るでしょう。

また，前件の「想定の主体」が，話し手自身ではない，すなわち，「外」からの情報に基づいていることも，その特長の一つである。それ故，話し手が自分の意図を聞き手，すなわち他人から言われて意識することはないので，(3)は非文である。

(3)　*(君の言うように) 僕が行くつもりなら，太郎も行くだろう。

自らの情報から発するのではなく，例えば(4)のように相手が言ったことを受けて，前件が述べられる。

(4) A：僕，今度アラスカへ行くんだよ。
B：アラスカへ行くなら，着るものをいっぱい持っていった方がいいよ。

また，「なら」は，元は「仮定」形であったにもかかわらず，目の前にある状態，実際起こっていることを，述べるのにも使われる。

(5) そこで歌を歌っているなら，仕事を手伝ってくれよ。
(6) 君も日本人なら，この位の漢字は読めるだろう。

さらに赤塚（1985）は次のような例では，「なら」の前件は話し手が今まで知らなかったことに対する「驚きの感情」を表わし，そしてそれは話し手だけが発することができ，かつそれを「真」であるとみなしている新情報であると述べている。そして，このような種類の文は，後件に「後悔の念」を表わすので，'surprise/ regret' conditional（「驚き/後悔」を表わす条件文）と呼んでいる。

(7) （友人を病院に訪ねて）
こんなに喜んでくれるなら，もっと早く来てあげればよかった。

Ⅱ

さて，この前件に関して興味深い現象が見られる。

(8) A：あいつ今度の仕事に張切っているみたいだよ。
B：あいつが頑張るなら，何か力になってやらなくては。
(9) A：あいつ仕事がうまくいってないみたいだよ。
B：＊もし，あいつが失敗するなら，何か力になってやらなくては。

（8B）は問題ないが，（9B）は非文である。この違いはどこから来るのだろうか。これら二つの文の違いは前件の動詞だけである。前者の文の動詞は「頑張る」，後者の文では「失敗する」である。

では，「頑張る」と「失敗する」はどう違うのだろうか。「頑張る」は自らの意志で行なうことができる行為である。自ら努力して頑張ることができる。自らの「動作・行為」を表わす「意志動詞」である。一方，「失敗する」のは，自らの意志で行なうのではない。「無意志動詞」である。かつ，このような動詞は「結果」として，そのような状態になっていることを表わす。「失敗する」のは何か努力したが，本人の意志の及ばない所でうまくいかなかったその結果を表わしているのである。

「（血が）出る」，「（咳が）出る」，「（雨が）降る」，「（台風が）来る」などの動詞も確かに無意

識的である。「(人間が部屋を) 出る」のとは異なり，人の意志の及ばないところで，自然に血や咳が「出る」のである。しかしながら，これらの動詞は「失敗する」のように，結果としての状態を表わわしてはいない。これらは，そのような「事態・出来事」が一時的に起こることを示す。これらの動詞は「なら」と共に使われる。

(10) A：天気予報では，明日は雨だよ。
B：雨が降るなら，傘を持っていかなくてはね。

次の例は(9)と同じく動詞が無意識的で，かつ結果を表わすので非文となる。

(11) A：あいつ泳ぐのがへただから，溺れるかもしれないよ。
B：＊溺れるなら，気を付けて見ていないとね。
(12) A：あいつこのままだと，ますますパチンコにのめり込むよ。
B：＊あまり深みにはまるなら，厳しく注意しないとね。
(13) A：あいつの事業，順調に行っているらしいよ。
B：＊あいつが成功するなら，おれたちもますます頑張らなくては。

「溺れる」，「深みにはまる」，「成功する」は「失敗する」同様自らの意志でそのような行為・動作を行なうのではなく，結果として自然とそうなるのである。[2]

ところが，今まで見てきたような動詞が前件に現われているにもかかわらず，文法的である場合がある。

(14) A：おれ，今度の成績悪くて落第するみたいだよ。
B：＊落第するなら，早く担任の先生に相談したほうがいいよ。
(15) A：おれ，もう一年学校にいるつもりだ。
B：落第するなら，もうこれから授業に出なくてもいいじゃないか。

「落第する」という動詞は「無意志動詞」として使われ，かつ結果を表わすのが普通の使われ方である。それ故，(14B) は非文である。ところが，この動詞が「無意志動詞」ではなく，「意志動詞」として使われる場合もある。それが (15) の例である。A は自らの意志で「落第する」という行為を行なうのである。「…するつもりである」という意味で使われる。「わざと」，「わざわざ」，「あえて」などの「意志」を表す副詞が (15) には使うことができるが，(14) ではできない。

(14') A：おれ，今度の成績悪くてわざと落第するみたいだ。
B：＊わざと落第する（つもり）なら，…
(15') A：おれ，もう一年学校にいるつもりだ。
B：わざと落第する（つもり）なら，…

また，このような動詞は「意志」の他に，「希望」などを表わす場合にも，「なら」と共に使わ

れる。

(16) A：こんなにしぼられるなら，おれ死んだ方がましだよ。
B：おまえが，死にたいなら，おれも付き合ってやるよ。

「苦労する」，「悪の道に入る」，「自殺する」などの動詞も，否定的・消極的な含蓄があるので，通常自ら進んでそのような行為を行なうとは考えられにくい。それ故，特別な場合を除いて「意志」あるいは「希望」を表す動詞としては使われにくい。

次の「…になる」という形の文もこれまでの例と同じように説明できる。

(17) A：こんなに忙しいんじゃ，病気になってしまうよ。
B：＊病気になるなら，あまり無理をしないようにね。
(18) A：僕，将来，エンジニアになりたいんだ。
B：エンジニアになるなら，理科系の科目をよく勉強しておいた方がいいよ。

(17) の「病気になる」は通常「無意志動詞」で，かつ結果を表わすものであると考えられる。普通は自らの意志で「病気になる」のではなく，結果としてそのような状態になるのである。一方「エンジニアになる」は，自らの意志でなる訳であるから「意志動詞」である。それ故，(17 B) は非文である。もちろん，わざと病気になる場合には「なら」と共に現われることができる。

(19) A：こんなに仕事が厳しいんじゃ，わざと病気になって休んでやろうかな。
B：病気になる（気）なら，もっと忙しくなってからの方がいいよ。

Ⅲ

前章では「無意志動詞」で，かつ結果としての状態を表わす動詞は「なら」と共に使われないことを示したが，以下のような場合には可能となる。

3.1 「(し) そうだ」，「ようだ」が続く場合

共に助動詞で「(し) そうだ」は元来，体言「そう」に「断定」の助動詞「だ」が付いたものである。「そのような様子だ，そうなる様子だ」という意味で「様態」，「推量」を表わす。一方「ようだ」は名詞「よう（様)」に「断定」の「だ」が付いたもので，元来は「そのようなありさま（有様）である」という意味であるが，幅広く「…の状態にある」ことを感知する言い方にも使われ「不確かな断定」，「婉曲」も表わす。これらの助動詞には仮定形「(し) そうなら」，「ようなら」，があり，「無意志動詞」と結び付くことができる。

(20) A：おれ，今度の試験の成績悪かったみたいだ。
B：落第しそうなら，なにか手を打ったほうがいいよ。
(21) A：彼女すぐ乗り物酔いするらしいよ。
B：具合が悪くなるようなら，無理しない方がいいかもね。

しかし，その他の推量を表わす助動詞「だろう」，あるいは「らしい」は，「なら」と共に現われることはできない。

(22) A：あの人多分，明日来ないと思うよ。
B：＊あの人が休むだろうなら，誰か他の人がその仕事やらなくちゃね。
(23) A：彼，相当お金貯めているらしいよ。
B：＊？そんなに持っているらしいなら，貸してくれるように頼んでみようか。

「だろう」は外部に根拠のない，話し手の単なる「推量・想像」を表わす。「らしい」は「ようだ」と意味が似ているが，「らしい」が外部の根拠に基づく「推量」を表わすのに対して，「ようだ」は外部の客観的根拠を持たず，むしろ，ものの「外見・様子・有様」に対する，話し手の主観的な「判断」を表わす。「らしい」同様，確たる根拠があることを示す「伝聞」の「(だ) そうだ」には仮定形「(だ) そうなら」が存在しない。[3]

言い換えれば，「らしい」，「(だ) そうだ」は話し手自身の「判断」を表わすというよりも，むしろ「外の情報を伝える」という働きをする。他方，「(し) そうだ」，「ようだ」は「外見・様子」に基づく「判断」・「推量」である。話し手が相手の発言を聞き，それを基に「彼は病気のようだ」とか，実際空を見て，「雨が降りそうだ」とかの「判断」を下すのである。

(20B) では，話し手は，「(君が) 落第してその状態にある」と言っているのではない。そうではなく，話し手は相手が「落第する」様子が今あると「判断」しているのである。人は「(何かが) …の様相を呈している」とは言えるが，誰も自然にその状態になっているだろうとは「判断」できない。(21B) も同様に，「(彼女が) 具合が悪くなる」様子があると「判断」すると，という意味である。

3.2 「くらい」が続く場合

副助詞「くらい (ぐらい)」は名詞「くらい (位)」から転用されたもので，元々「分量，程度」を表わし，「…くらいなら」の形で，「ある事がらを引き合いに出し，それに比較して，他のものを，より強く主張する」という意味で使われる。

(24) A：おまえ，このままじゃ留年するよ。
B：留年するくらいなら，おれ学校をやめるよ。
(25) A：ここずっと仕事が忙しくて，ダウンしそうだ。
B：それで体をこわすくらいなら，今の仕事変わったほうがいいと思うよ。

前節で「無意志動詞」は「(し) そうだ」，「ようだ」と結び付くことができ，そしてこれらの助動詞は共通して，「外見・様子」に基づく，話し手の「判断」を表わすことを見た。「くらい」も同様に，話し手の「判断」を表わすと言える。(24) では，結果として「留年」していることを予想しているのではなく，「留年する」という (ひどい)「程度」にまでなると「判断」すると，という意味である。そして話し手はそれと「学校をやめる」とを比較し，後者のほうがまだましだと，後件で主張している。

3.3　過去形で使われた場合

これまでの例ではすべて，「無意志動詞」は現在形であったが，過去形になった場合には「なら」と共に現われることができる。

(26)　A：太郎君入試に失敗したらしいよ。
　　B：あんなに勉強していたのに落ちたのなら，さぞがっかりしているだろうね。
(27)　A：あの人働きすぎて病気になったらしいよ。
　　B：病気になったのなら，しばらく田舎で静養するといいよ。

「失敗する」，「落ちる」，「病気になる」のような「無意志動詞」は現在形で使われた場合，結果として起こっている状態を示し，それは人間の意志・意図を越えたものなので，話し手を含め誰もその状態になっているとは「判断」できない。

ところがこれらの動詞が過去形で使われた場合には，本当かどうかは別として，少なくとも外部からの情報により，そのような状態にすでになっていると「判断」することができる。それ故，「なら」が使える。(26) では，相手が「太郎君は（現に）試験に失敗した状態である」と言っているのだから，話し手はそうであると考えることができる。

Ⅳ

「(し) そうだ（そうなら)」，「ようだ（ようなら)」，「くらい」が続いた場合，および過去形になった場合，「無意志動詞」が「なら」と共に現われることを見てきた訳だが，すべてに共通しているのはこれらの形になれば，話し手が自分自身の「判断」を表わせるということである。

「なら」は最初見たように，その前件の「想定の主体」が話し手ではなく，話し相手など外部にある。話し手はそこから情報を獲得し，その情報を基にそれがそうであると「判断」あるいは「仮定」し，その条件の下では「…である」と，述べるのである。つまり，「なら」の前件には，話し手が外部の情報から，「そうである」と「判断」できるものがこなければならない。それ故，これまで見てきたように「無意志動詞」で，かつ「結果としての状態」を表わすものは話し手が「そうである」と「判断」できないので「なら」と共には使えない。

「(雨が) 降る」などの動詞は無意志的ではあるが，「結果としての状態」ではなく「一時的な出来事」を表わしている。それ故，そのような「事件・出来事」が（未来に）そうでない状態から新しく起こる（だろう）と話し手が「判断」することは可能である。

「無意志動詞」で，かつ結果を表わすものも，「(し) そうだ」，「ようだ」，「くらい」が続けば，そのような「様子」，「外見」，「程度」である，また過去形になれば，すでにそのような「状態になっている」と「判断」できるので，「なら」が使えることになる。

「意志動詞」の場合は，実際はそのような行為・動作があるかは別として，外部の情報から，少なくともその「意志・意図・気持ち」はあると「判断」できるから，「なら」が使える。

ある場合には「なら」と非常によく似た意味で使われる「理由」を表わす「から」は，「無意志動詞」が現在形でも共に現われることができる。

(28)　あの人今のままじゃきっと体をこわすから，あまり無理をしないよう言ってやろうよ。

「から」は「なら」とは異なり前件の「想定の主体」が外部にあるのではなく，話し手自身である。外部の情報に基づく「判断」ではなく，話し手自身の内から出る「確信」，「推測」などを表わす。[4]

本稿では日本語の「なら」を取り上げたが，英語においてもこのような現象が見られるのかも調べなければならない。

注

＊本稿は同名の研究ノート（村山　1988）を発展させて，大幅に書き加えたものである。

1　Kuno（1973），井上（1978）参照

2　「無意志動詞」は「(気分が）落ち込む」のように，「…する」，あるいは，「事業に失敗する・成功する」，「彼に出くわす」のように「…に…する」の形が多いようである。「風邪をひく」のような例もあるが，「…を…する」の形は少ないようである。

3　「らしい」，「ようだ」の違いについては，柏岡珠子（1980），森田良行（1980）参照

4　Akatsuka（1985），Murayama（in preparation）参照

参考文献

Akatsuka, Noriko. 1985. “Conditionals and epistemic scale,” *Language*, 61：3

Alfonso, Anthony. 1966. *Japanese Language Patterns*

井上和子他　1978　研究報告『日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究』昭和53年度科学研究費補助金特定研究(1)　310721

神尾昭雄　1985.「談話における視点」『日本語学』4：12

柏岡珠子　「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41

国立国語研究所　1951.『現代語の助詞・助動詞　—用法と実例—』秀英出版

Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press

森田良行　1977.『基礎日本語　1』角川書店

———　1980.『基礎日本語　2』角川書店

村山康雄　1988.＜研究ノート＞「なら」と前件の動詞『ふじみ』10

Murayama, Yasuo. “Japanese conditionals and the information,” in preparation

西出郁子　1969.「研究ノート」Ⅰ—「らしい」および「そうだ」—『日本語・日本文化』1

上野田鶴子　1972.「終助詞とその周辺」『日本語教育』17